

冷害と青森県の米づくり

八戸市立市川中学校 森永洋行

1. 二つの年度に注目

地図帳p.104「④東北地方の冷害と米の品種」を用いて授業を行う場合、資料に示された二つの年度に注目させたい。「どうして地図が1993年、円グラフが2003年と10年も違うのだろう？」と疑問を投げかける。地図には「平成5（1993）年東北地方の冷害の記録」とあることに気づかせ、冷害後の10年間の工夫の成果として円グラフがあるという形で、授業の見通しを持たせたい。

2. 二つの年度と青森県

1993年は当時1000万tの米需要に対し、収穫量が800万tを下回る未曾有の大冷害となり、不足分をタイ・中国・アメリカから緊急輸入した年である。彩色地図に注目すると、太平洋側で稲の10aあたり収量(以下「反収」)が大きく落ち込んでいる。東北地方は例年反収が500kgを超えるが、青森県の反収は159kg、とくに南部地方(太平洋側)は5kg程度の大凶作となった。原因とされるやませの影響であるが、実際太平洋側の八戸では7月の平均気温が平年比-3.7℃、日照時間-69.5時間であった。また、グラフが示す10年後の2003年も冷害年であり、青森県の反収は308kgと全国最下位であった。米(水・陸稲)収穫量順位も東北6県中唯一10万t台の全国19位となっている。

3. 青森県の品種改良の特色

しかし1994年以降、青森県の反収は前記2003年を除き全国5位以内である。2007年の収穫量は約30万tと11位、反収は581kgと3位で、「厳しい環境の中で高い生産性を誇る県」である。その工夫が品種別収穫量の円グラフに表れている。東北地方では1993年冷害の反省から耐冷性の強い「ひとめぼれ」の栽培が普及したが、青森県の品種別収穫量グラフは異彩を放っており、青森県だけ他県と品種が違うという点に気づかせたい。青森県では1993年は「むつほまれ」が80%近い作付割合であったが、特定品種が県全体に偏って作付けされ

たことが冷害を助長したとの反省から作付品種の分散が求められた。1997年から「つがるロマン」の栽培が始まり津軽地方(日本海側)の主力品種となった。さらに1999年には耐冷性がより強い「ゆめあかり」が冷害の影響が大きい太平洋側を中心に栽培されるようになり、円グラフのような割合となった。その後「ゆめあかり」の耐病性と収量性を改良した「まっしぐら」が太平洋側の主力品種となった。2008年には「つがるロマン」と「まっしぐら」の2品種で90%以上を占め、「青森県の品種改良は現在進行形」と印象づけられる。

4. 青森県の生産調整(減反)政策

1993年は初めて日本の食料自給率が40%を下回った年でもあり、この年青森県の生産調整面積は23,000haであった。その後自給率は持ち直したが、米の在庫も増えたため、1998年には30,000haを超えた。2003年には冷害であったにもかかわらず、米の消費減少と米価下落に歯止めがかからないため36,000haと最大の生産調整を行った。転作作物には大豆や小麦、いちご等が挙げられる。その後生産調整の面積は減少したが、2004年から生産調整の配分方法が面積から数量に変更された。これは生産性の高い稲作を行う青森県には痛手であると考えられる。

参考文献 『わが郷土 八戸』(八戸市中社研)
農林水産省HP
東北農政局資料
青森県庁三八地域県民局資料



「中学校社会科地図 初訂版」p.104